

優しい世界

ぽんDAリング

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突発的に書いたモノなので設定とか全く考えてない。

続くかも分からない俺ガイルSS。アニメしか見てないので色々間違っているかも。

目次

優しい世界	1
続・優しい世界	6
続・続・優しい世界	13

優しい世界

「やあ、おはよう比企谷。…なんだか眠そうだな。また夜更かししたのか？」

靴箱から上履きを取り出していると友人から声がかかる。

朝から笑顔で挨拶をしてくる友人は葉山 隼人。何の因果が俺とコイツを結んだのかはさておき、校内一のイケメンでモテる男は同性の俺から見ても惚れてしまいそうになる爽やかさ全開のスマイルだ。

「ハヤハチ…愚腐腐……」

——いや、俺にその気は全く無い。だから鼻血は拭いてくれ、海老名さん。

「…よう葉山、海老名さん。昨日買った小説ラノベが面白くてな。寝る前に少しだけと思ってたら読み耽っちまった。寝たのが4時過ぎだったわ。つてことで、授業中寝ちまったらノート見せてくれな」

等と冗談を混じえつつ、葉山と海老名さんが上履きに履き替えるまでの少しの時間を会話で繋げて待ち、葉山と並んで教室までの数分をゆっくり歩く。海老名さんが俺らの後ろを不快な含み笑いを浮かべてついてくるのは慣れた。

教室に着くとクラスメイトに挨拶を交わしつつ、自分の机に鞆をかけて俺らの定位置である教室の窓際後方へ足を運ぶ。

教室の窓際後方にて隣り合う葉山と三浦の机。クラスの中心人物2人の元へ皆が集まるのでココが定位置なのだ。

「あっ！ヒツキー、やっはろー！」

「八幡、おはよう！」

「ヒキオ、おはよ」

「ヒキタニくん、チーツス!!」

「比企谷、おはよー」

「おっす、比企谷！」

定位置には友人たちが既に集っていて楽しそうに挨拶をしてくれる。

由比ヶ浜、戸塚、三浦、戸部、大岡、大和それぞれに挨拶を返して俺も会話の輪へと入り込む。

「ん？川崎と相模はまだ来てねえのか？川崎は兎も角、相模が遅いのは珍しいな」

いつもの定位置に居る友人が少ないのでそれを会話のタネとする。

「あ、サキサキは少し遅れるってメール来てたよお」

「さがみんはさつき校門のトコ走ってるの見えたからそろそろ着くんじやないかな？」

海老名さんと由比ヶ浜が2人の動向を口に出したところで相模が息を切らせて教室へと飛び込んで来た。

「よかった、間に合ったあ…みんなおはよー！いやー、コンビニで立ち読みしてたらついつい長居しちゃってさあ！」

なんてのたまう相模を皆で笑い、少し弄った辺りで担任が教室へと入って来たのでそれぞれが席に着く。

因みに、川崎が来たのは二限目が終わってからだった。何でも、妹を保育園に送って行ったのは良いが、保育園への大事な申請書類を家に忘れたらしく取りに帰ったらしい。何とも真面目な奴だ。

☞

「あーしきさあ、思うんだけど。ヒキオ髪切れし。んで、髪染めれば良いと思うんだけど」

我が女王様は突飛な事を言い出す時がある。今では慣れたものだが、当初は面をくらったものだ。

「あ、ソレあるんじゃないやね？隼人クンと俺、ヒキタニくんの3人で渋谷歩けばスカウトの一つや二つラクショーっしょ？」

戸部の脳内お花畑な想像は稀に…いや、頻繁にある事なのでこの際スルーだ。俺からはツツコまない。ツツコミは大和・大岡に任せる。「いやいや、髪切ったら俺のチャームポイントが無くなっちゃうだろ。小町とお揃いのアホ毛が無くなるなんて耐えられない。ついでに、染髪しちゃうと小町が真似る可能性が出てくる。そうになると、黒くて艶

やかでサラサラな小町へアーの魅力が失われてしまう。だから、俺は髪は切らないし染めない。全ては小町の為に。兄である俺は妹の小町の為に生きなければならぬんだ。

あ、コレ八幡的にポイント高いな」

今は昼休み。皆で机を寄せて昼食を摂ろうと準備しているのだが、俺の発言にそれぞれが机ごと一歩後退する。

——おい、やめろ。無言で引かれるとマジで傷付くから！

「あら、本当に小町さんの為を思うのなら存在そのものを消滅させるのが一番効果的だと思うのだけど。ねえ、シス谷くん？」

背後から辛辣な言葉を発しながら現れたのは雪ノ下だ。昼休みになるといつもこの教室へ訪れるが、自分のクラスに友人は居ないらしいので仕方ない。

「いやまで。それは駄目だ。小町は世界一かわいいと言っても過言ではない。いや、寧ろ世界一だと断言する。そんな小町だからこそ群がる羽虫が現在進行形で現れているだろう。

だから俺は小町に寄って来る羽虫を逐一駆除せねばならないという使命がある。

よって、俺はまだ俺という存在意義を全うする為に滅せられる訳にはいかない。分かったか？」

雪ノ下へ至極当然に反論を返す。

「まったく、この男は……」

指先を額に当ててため息を漏らし、さも困ったという表現手段を取る雪ノ下。

「ヒツキー、マジシスコン。キモい」

「ヒキオマジキモい」

由比ヶ浜と三浦は蔑んだ瞳を俺に向けてキモいキモいと連呼しては心を抉る。

「……これは流石に擁護出来ないな、ハハハ」

葉山に至っては苦笑いを浮かべつつ援護を諦めやがった。

ま、俺と雪ノ下にとってこんな掛け合いは日常会話の範疇だし、俺の言動に対して三浦と由比ヶ浜がキモいと言うのはいつも通りだか

ら特段傷付いたりもしない。

——なんだかんだ言いつつ、こんな遣り取りが楽しいんだよな。

これが俺の日常であり、俺たちの生活の一部なのだ。

俺からスルーされた戸部がギャースカ喚くが三浦に一蹴されているが……悲しいかな、それも日常だ。

※ ※ ※

「で、さっきの話なんだけどさ」

それぞれが広げた弁当に箸を伸ばしている中で、川崎が若干不機嫌そうに俺に視線を向けて口を開いた。

「あんたにとつてウチの大志も…その、羽虫になるの？」

川崎の言う大志つてのは川崎 大志、つまりコイツの弟だ。小町の同級生で、以前小町経由で相談を受けたことがある。

相談つてのは川崎…今日の前に居る川崎 沙希の事。あの相談以降接する機会が増えて、今ではこうしていつもの友人たちと共に昼飯を食べる仲になっている。

「あいつが小町に群がる羽虫程度の小僧だったら既にプチツと潰している。お兄さんと呼ばれるのはちと癪だが…まあ、あいつだったたら認めやらないでもないかな」

柄にも無い事言ってる自覚はある。だから、つい言いながら顔を背けてしまった。川崎はそんな俺を見て少しだけ頬を緩めた。

「ホント、捻くれてるよね。アンタ」

「…ほっとけ」

再び自分の弁当へ箸を向けると、視界の端に川崎の弁当が入った。ちよつとした悪戯心で箸を持つ右手を更に伸ばして川崎の卵焼きを頂いて口へ放り込む。

「…うん。程良い砂糖の甘さと干し椎茸出汁の効いた卵焼きだな。めっちゃ美味え。毎日食いたい」

川崎母は料理上手いなだな、と素直に賞賛を贈ると川崎は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

——勝手に卵焼きを取った事に怒ったのか？コイツそんなに卵焼きが好きだったのか。なんか悪い事したな。

「…勝手に卵焼き食べちまってスマン。俺のやるから機嫌直してくれ」

俺の弁当から卵焼きをとって、そつと川崎の弁当へ移す。川崎は俺からの卵焼きを見てから大きな深呼吸をして箸を伸ばした。

——ん？そんなに気合入れて食べる程卵焼き好きだったのか？

「…醤油を少しと昆布出汁。あと、すり胡麻ね。アンタのも美味しい。今度ウチでも作ってみる」

「おう、今日のも俺が作ったんだ。美味いって言われると嬉しいわ」

実際、自分が作った料理を美味いと言われるのは嬉しいし、明日からの弁当作りもモチベーションが上がる。

と、つい頬が緩んだまま川崎に返事したら再び俯いてしまったので俺は気付く。

いかん。つい笑い掛けてしまったが、俺の笑顔はキモいらしい。本を読んできるとつい笑ってしまう時がある。それを見た三浦と由比ヶ浜には口を揃えて『キモい』とよく罵られる。

「…流石、八幡だねえ」

「ん？ああ、サンキューな」

戸塚から呆れの含まれた苦笑にため息の混じった賞賛(?)を頂いた。何に対しての『流石』なのかに首を傾けるが、きつと自作の弁当に対してだろう。

——まさかこれは『毎日僕に弁当作ってよ』という遠回しのプロポーズではないだろうか？もう戸塚ルートに入って良いよね？

なんて天使戸塚との将来を真剣に考えようとしたら由比ヶ浜と雪ノ下にすげえ睨まれてた。

そんなに俺の笑顔はキモいか。もう有害指定されるレベルなのか。解せぬ。

続・優しい世界

「ん……ん？」

朝目が覚めると知らない天井だった。ただ、それだけならテンプレな三番目の少年を真似た台詞を吐くだけだったんだが……

「……おい、雪ノ下。ここはどこで、なんでお前が居るんだ？」

知らない部屋で寝ているだけじゃなく、何故か雪ノ下雪乃が眠る俺を見下ろしていた。

「……目が覚めたのね。ここは貴方のご両親の部屋よ。」

そうね、貴方は風邪をひいて……それはもう、玄関先で意識を失う程の高熱で。

貴方の自室は2階でしょう？か弱い私が貴女を運べる訳ないじゃない。

勿論、小町さんからこの部屋の使用許可は頂いているわよ」

「……そうか。どおりで怠い訳だ。いや、すまん。迷惑かけたな。礼を言う。」

布団に寝ているが妙に体が重くて苦しい。風邪をひいたとなればそれも納得だ。それに、この部屋の壁紙はなんだか見覚えがある。それが両親の部屋だからだと言うのならそうなんだろう。

そんな俺を雪ノ下は優しげに微笑んでいる。

「今、何時だ？」

俺は両親の部屋のどこに時計があるか知らないし、視線の届く範囲にもそれらしいものが見当たらないので率直に雪ノ下に問う。首を動かすことすら億劫だったとか起き上がる気力すら無かったというのものもある。

「今は13時を回ったところよ。……因みに、今日は日曜日で学校は休みだから安心して頂戴。あと、小町さんは少し出掛けているわ」

「そうか……スパーヒーロータイムを見逃すなんてとんだ失態だ。今週のプリキュアは山場だったはずなんだがなあ……小町はまあ、いつもの事か」

「まったく貴方は…」

そう言つて額に手を当てて呆れる雪ノ下。

だが、その言動とは裏腹にとても嬉しそうに口元だけは笑つていた。

「それはそうと、お腹は空いていないかしら？お粥でも作りましょうか？」

そう言われると腹は空いている気はする。だが、それ以上に体が怠くて食欲が無い。

お粥でも作ると言つてくれた雪ノ下には悪いが正直に言つて断る。

「…いや、なんとなく腹は空いてる気はするが食欲が無い。」

「けれど、何か食べて栄養を摂っておかないと治るものも治らないわ。そうね、冷蔵庫にゼリーがあつたはずだから持つてくるわ」

言うやいなやスツと立ち上がり部屋を出る雪ノ下の背中を見送り深く息を吐く。

——今日の雪ノ下は優しい。

いや、病人相手にいつもの毒舌を吐く程雪ノ下は鬼では無いのは知っている。けれど、そういう意味じゃなくて、何というか…こう、親しい間柄の優しさ…的に感じてしまうのは俺の自意識過剰なのだろうか？

と、考えていると足音と話し声が微かに聞こえてくる。足音は雪ノ下だろう。話し声は小町が帰つて来たのだろうか。にしては小町より幼い子供の声っぽい感じだ。

「待たせてしまったわね。やっぱりゼリーがあつたわ。これだけでも食べれば少しは違うはずよ」

「ああ、サンキュ」

体を起こそうと力を入れてみたが思いの外体が起き上がらない。嘘のように腕にも力が入らず愕然としてしまう。

「ああ！無理はしないで、手伝うわ」

雪ノ下は素早く俺の傍に寄つて背中へ腕を添えてから少しだけ俺の体を起こし、枕元にあつたのか大きめのクッションを背もたれ代わりに差し込んでくれた。

「すまん、助かった」

「いいのよ。こういう時は甘えてちょうだい」

「ーまただ。」

雪ノ下は優しく…親しい者へ向ける様な微笑みを俺へ向けている。

「なあ、雪ノ下。さつき、話し声が聞こえたんだが他に誰か居るのか？」

「…ええ、その…貴方の親戚の子が来ているの。貴方が風邪で眠っているから静かに、とはお願いしていたのだけれど騒がしかったかしら…」

少し動揺しながらも、俺を困らせたくないという風に恐る恐ると言葉を発する雪ノ下。

「いや、悪い。ただ疑問に思っただけだから気にすんな。」

そつか、親戚に小さい子なんていたのか。初めて知ったわ…俺は親戚からもハブられてんのかよ、流石プロボツチ」

皮肉っぽく自虐ネタを口にしたが、内心では違和感が大きくなってきている。

そもそも、俺自身が風邪をひいた事は記憶に無い。玄関先で意識を失ったと雪ノ下は言ったがそれ以前の記憶すら失うなんておかしい。

「ほら、まずは食事にしましょう。それから横になっておけばその内眠れるわ」

「…ん、そうだな」

取り敢えず、今は雪ノ下の言う通りにおこう。今の怠きはマジで辛い。

「はい」

雪ノ下はそう言ってスプーンを差し出してくる。

「…いや、なにやってんの？」

差し出されたスプーンには既に掬われたゼリーが乗っていて、所謂『あーん』の状態で俺の口元へ向けられていた。

「っ?!あの、つい?」

「つい、でそんなことすんのかよ。女子力○高いな。…あゝ、その、なんだ?思っただけ腕の力がいらん。だから、その…そのまま甘

「じゃあわたしもいつしよにうたうー」

♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~

ーあ、そうだった。そうか。

ーああ、雪乃。ごめんな。こんなボケた老人に合わせてくれて。ありがとな。

「ー雪乃、おやすみ」

「っー……ええ、おやすみなさい。八幡」

という夢をみたんだ。

夢が自分の願望を表すものなんだとしたら、まさに今日みた夢は俺の願望そのものだと言える。

雪ノ下、お前が夢の10分の1でも優しくしてくれれば俺はもう少し平穏な日常を送れるのではないかという願望だ。つまりだな、俺は日々お前の罵倒毒舌暴言誹謗中傷に知らず知らずの内に心を傷めているって事なんだ。だからもう少し穏便な言葉を選んでほもらえなだろうか？」

今日も友人たちと昼飯を共にしていたんだが、合流した雪ノ下は今日も絶好調な様子で俺への罵りを紡いだ。

発端は単純。座席位置だ。

いつもなら隣り合う二カ所に机を並べて6人づつで食べるが今日に限って『皆で食べよ』とアホの子が提案しちゃった訳だ。

で、今日は俺の左に戸塚が座り、右に戸部が座った。葉山・三浦・

海老名・由比ヶ浜と並び、由比ヶ浜の隣には雪ノ下が、それから相模・大和・大岡・川崎の順が座席位置となった。

形としては長方形に机を並べて皆で机を囲む。この時、俺の対面に雪ノ下が座ったのだ。

俺が正面に居ると視姦されるから始まり、俺を犯罪者・犯罪者予備軍を文字つたあだ名で罵倒し、いわれの無い冤罪もでっち上げられる誹謗中傷を受けた。

いつもの罵声くらいならそうそう気にはしないが今日は何時にも増して攻撃的だった。…もしかあの日か？なんて思っただけで凍てつく視線を向けられて俺は昼食どころではなかった。

周りの奴らは『またか』と気にもせず弁当を広げている。薄情者め。流石にそうなつてくると俺でも苛立ち始めるのは仕方ないだろう。そこで、今朝の夢をジークムント・フロイト先生の夢分析を用いて、どうにか罵倒を少なくさせる策に打って出た。

すると、なんとということでしょう。

あの、止まる事の無かった罵詈雑言のマシンガンが止み、俯き静かになった雪ノ下が正面に居るではないか。

「夢とはいえボケちまった俺が訳分かんない事言っても否定せず話を合わせてくれる順応力。困惑しない様に辻褄合わせを瞬時に出来る聡明さ。俺の事を考えて背中を支えてくれて、面倒な食事も子守唄さえも歌ってくれた優しさ。」

お前は順応力も聡明さも既に持ち合わせている。それはそのままに優しさを少しでも俺に向けてくれたなら、きっと俺は幸せで平穏な日々を送っていけると思う。今朝の夢はそんな俺の願望の表れだ。そう思わないか？」

俯いた雪ノ下はピクリとも動かない。友人たちも俺を見つめたまま動かない。

…あ、ちよつと待て！これはアレだ。よくよく考えたら黒歴史じゃね？

孫が出てくるって…俺と雪ノ下がアレしてアレでアレだろ？そんなアレだ。

「比企谷…俺は君を尊敬するよ」

いつも以上の似非スマイルを浮かべた葉山がシンと静まる教室で
呟いた。

「パネエ。…マジ、ヒキタニくんパネエっしょ！」

「…俺たちに出来ない事を」

「平然とやってのけやがった…」

「流石にこれはヒキオが悪い」

「ウチも優美子に同意」

「八幡？…ここ、教室だよ？」

「ねえねえ、隼人くんの夢は見てないの？…愚腐腐」

共に机を囲む友人たちが葉山に続き声を上げるが耳を素通りする。

「ヒツキー？」

「比企谷？」

般若が2人、俺の腕を左右から掴む。

「ヒイツ?!…しよのでしゅね、夢…そう！たかが夢の話れしゆので!!」

「ゆきのんだけズルイ！」

「雪ノ下だけズルイでしょ！」

ーやはり、俺の青春ラブコメは間違い続ける

続・続・優しい世界

一にも二にも言われる事。挨拶は大事、だと。朝はおはよう、昼はこんにちは、夜になったらこんばんは。時間帯での使い分けも確りとやるべきだ。

「やっはろー!」

「はろはろー!」

もう一度言おう。：挨拶は大事だ。

「むーっ。ヒッキー!なんで無視すんのっ!」

「……由比ヶ浜、海老名さんおはよう。あのお、お前たちの挨拶はいつも主語が欠けてる。ホントに俺へ向けて言ってるのか分からなけりや返事のしようも無いだろ?背後からだど余計にだ。」

それと、今は朝だ。『ヤッホー×Heieroo』も『Hello×Hello』も間違ってるだろ」

「やだ、挨拶で掛け算なんて…ヒキタくん早朝から破廉恥…：愚腐っ!」

「頼むから腐海へ帰ってくれ」

ちよいちよい擬態の解ける海老名さんはこれ以上相手にしてはいけない。

「ヒッキー何言ってるのか意味分かんないし。朝からキモイ」

ーいや、なんで俺のキモさに帰結すんだよ…

「俺の友だちの友だちがな、後ろからおはようって女生徒に声掛けられたらしいんだ。そいつは振り返っておはようと返した。だが、最初に挨拶した女生徒はそいつの前を歩いていた女生徒その2に対しての挨拶だったんだ。女生徒は俺…じゃなかった、そいつを追い抜き女生徒その2に合流してこう言った。『なんかあいつマジでキモいんだけど』とな。」

だからそいつは誓った。今後は正面から目を合わせる奴の挨拶か名前を呼ばれてからの挨拶にしか返事はしないと…」

登校時に友人と挨拶を交わす。そんな事も今では当たり前だが、去

年や中学時代はボツチだった俺にとって本当に様変わりしたもんだと感慨深いものだ。

「それメツチャヒツキーの話じゃん！途中で俺って言ってたし！

ってか、さすがに私らの声は分かるでしょ!!ヒツキーに言った挨拶だって分かれし!!」

「うっ…」

まあ、日常的に連んでる友人の声くらい聞き分け出来る。あんな変てこな挨拶するのはこの2人くらいなもんだし、当然この2人だと気付いたうえで無視したのも事実だ。

反論を諦めて溜め息を漏らす俺を置いて、由比ヶ浜と海老名さんはさっさと教室へと進んで行く。

仕方ないので俺は今日の授業科目は何だったか思い出しながらその後を付いて行く。

2人が話しながら階段の半ばに差し掛かると同時に由比ヶ浜はハツと何かに気付いてこちらを振り返る。

「ヒツキーの変態！スケベ！キモイ！」

そう言うとう自分の鞆でスカートを抑えて勢い良く階段を駆け上がって行きやがった。

突然の事で呆気にとられ、由比ヶ浜の行動を瞬時に理解し弁解する事が出来なかった。

「ーちよっ！待て、冤罪だ！」

俺は言葉を発する暇も無く走り去った由比ヶ浜へ恨めしい視線を送るが当然届かない。

そして、未だに階段の半ばに佇む海老名さんは鞆をスカートの前に持ち替えてスカートを抑え、ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべている。だが、目は笑ってない。

「いや、マジで見てねえから！そんなつもりも無えから!!」

「ふーん。…ま、そういう事にしといてあげるね」

再び冤罪を重ねる訳にはいかんと海老名さんを追い抜き、先に階段を駆け上がる。

教室まで俺の背後を歩く海老名さんとは終ぞ会話は無く、気まずい

雰囲気のままだった。

その後、教室で三浦と雪ノ下に犯罪者扱いされたのは言うまでも無いだろう。

☞

「おはよーつす」

放課後、俺らは部活動に参加すべく教室で適当に会話を交わして解散する。

俺と雪ノ下、由比ヶ浜は奉仕部。隼人と戸部はサッカー部、戸塚はテニス部で大岡は野球部、大和はラグビー部って感じだ。

部活動をしていない三浦と海老名さんに相模は他の友人と何処かに行くらしい。川崎は妹を保育園へお迎えだそうだ。お姉さんは偉いなあ。

部員3人でまとまって動いている為、部室に誰かが居る訳じゃないが何となく挨拶をしながら部室へ入ってしまう。

「そーいえばヒツキーって何気にちゃんと挨拶はするよね？今朝もなんか言ってたし」

「いや、常識の範疇だろ。つか、こんな挨拶にはならん。軽々しい挨拶は社会に出たら確実に説教くらうからな。そう考えたら由比ヶ浜はアウトだ。今からちゃんと学んどけよ」

そう、俺は知っている。例え昼だろうと夜だろうと出勤した時の挨拶は『おはようございます』だ。

上司への挨拶は敬意を込めた30。のお辞儀をもって挨拶しなければならぬ等々。

俺が高校へ進学する際、親父から色々と指導してもらった事だ。全ての会社がそうではないだろうが、覚えていて損は無い内容だった。「あら、珍しくマトモな事を言うのね。何時だったか『将来の就職先は自宅』だなんて言っていた人物だとは思えないわ。ねえ、社畜谷くん？」

「往々にして将来の構想は幾つか想定して然るべきだろ。俺の第一志

望は専業主夫で変わりないが、それは相手在りきだからな。学生ならともかく、その相手が見つかるまでは生活の為に働かなきゃならんら？永遠と親の脛齧る訳にはいかんしな。その分は考慮して親父から社会勉強も受けてるし、その一環で母親紹介のバイトもしてる。ついでに俺は働くなら公務員希望だ。だから、社畜じゃなく公僕だな」

俺は俺なりに将来を考えてはいる。1番は働かずに養ってもらう事だが、世界はそんなに甘くない。なので2番目、3番目の道を今のうちから考えておくのは当たり前だ。

「へえー、ヒッキーってちゃんと将来とかも考えてんだ、意外。私はまだ先の事だーって思ってたけど…」

「相変わらず」両親ともに仲が良いのね」

由比ヶ浜はほへえ、とだらしなく口を開け、雪ノ下は俺に対して優しく微笑む。

「ーんな慈愛に満ちた微笑み見せんよ。うっかり惚れちまって告ってフラれちゃうだろ。」

『…あと、由比ヶ浜さん、あなたはもつとしっかり考えるべきだと思うわよ？例えば、誰かさんとの交際を望むなら特にー』

雪ノ下が少し意地悪く笑みを浮かべて由比ヶ浜へ何やら耳打ちすると、突然ワチャワチャと焦りだした由比ヶ浜は雪ノ下の口を塞ごうとする。

が、それを軽く躲す雪ノ下。何度かそれを繰り返して楽しそうに追いかけてっこへと発展し、俺は1人蚊帳の外だ。

仕方ないのでいつもの定位置に座り、喧騒を感じつつも鞆から取り出したラノベを開いた。

「ーったく、こいつらと居ると暇しねえな。」



「……で？なんでお前がここに居んの？」

「むっほんー…新作のラノベを書き終えたのだが、お主の教室へ参じるのは些かハードルが高い!!故に、依頼という形でコレの感想を頼む

「！」
これで何度目になるのか、材木座は3人分の原稿束を自信有り気に机へと置いた。

三浦の事恐がってウチの教室へは来ないが、奉仕部には来やがる。依頼だと言えば断られないって慢心してんだろうな。ウチの部長はそんなに甘くねえぞ……

「材木座くん？先日、あなたに課した問題の矯正は出来たの？先ずはその報告から為べきではないかしら？」

それとも、コレが課題の結果書き上がったモノだとすると、題名の時点で効果は無かったのだと判断するけれど？

なにかしらこの題名。『我の友人がクラスでも部活でもラブコメハーレム主人公な件について』？既存のライトノベルに何冊も似たものが出版されている以上オマージュではなくパクリだと何度言えば理解出来るのかしら？」

「はぶぐつー……いや、しかしだな、先日の課題『身の回りで起こった出来事を文章表現してみよう』を實踐していてコレが書き上がったのだ。ほぼノンフィクションの大作であるっ！……というか雪ノ下氏がヒロインな訳で」

「それならそうと早く言いなさい。先ずは読んでから評価するわ」

なんかキャラ変わってませんか？チヨロノ下さんになってませんか？

ってか、ノンフィクションでハーレム主人公なんて存在すんのかよ。……あ、居たわ。隼人か、隼人なのか。あんにやろ、材木座が作者だとしても本の中でも主人公だなんて羨ましい限りだ。

えつと、なににに。

——総文学園に通う引田八郎。総文学園のマドンナ雨ノ宮雨乃、幼馴染みの弓ヶ丘由実やクラスメイトの山金加奈などの美少女達から愛されるが捻くれた性格の八郎はその愛情に気付かない。八郎を振り向かせたい美少女達が織り成すドタバタラブコメハーレム……

……ナニコレ。チヨーツマラナソー。

「なあ、材木」

「ぬぽっ?!座は?!我、杉とか檜じゃないぞ!」

「なあ、木材」

「あるばっ?!とうとうホームセンで販売されてそんな名に……して、何用だ!八幡っ!!」

「マジで嫌な予感がすんだけど。コレ、主人公誰がモデル?」

「フツ、知れた事を!お主に決まっておろう!!……いや、マジでリア充爆発しろ」

「ーええ、うっそお、マジでえ、有り得ないんですけどお……うわキモっ!

チラリとヒロインのモデル(?)である2人を見ると何時になく真剣に材木座のラノベ原稿を読み進めている。

「……あなの、木」

「ふびっ?!遂に加工前になってしまった」

「こま……じゃねえ、妹キャラとクラスメイトの男の娘キャラは攻略可能か?」

「いや、今作には出てこんぞ」

「はっ」

「ヒロインは学園のマドンナと幼馴染み、クラスメイトの3人だ。本命はマドンナだと思っていたのだが、書き進めるうちに幼馴染みとクラスメイトのキャラも立ってきてな。『to Loveりんぐ』みたいな結局誰が好きなんだよこのヤロー路線も良いかなあなんて」

「ふざけんなよ、オイ!こま……妹キャラも男の娘キャラも居ないなんて有り得ないだろっ!俺がモデルならこま……妹キャラと、とっ……男の娘キャラは必須だろうがっ!!せめてラノベの中くらい小町や戸塚とキヤツキヤウフフさせてくれよお!!」

「ヒツキーってば小町ちゃんとか彩ちゃん好き過ぎっ!!」

「そうね、もつと現実を見なさい。さっさとこの原稿も読みなさい。そしてヒロインである、わた……雨ノ宮の様な清楚で可憐な女性の素晴らしさに気付きなさいシスゲイ谷くん」

「ゆきのん何言ってるの?!ヒツキーにはユミユミみたいな明るくて気の利く女の子の方が良いに決まってるじゃん!!」

「いいえ、私の方が相性は良いはずよ」

「はあ?!私の方がお似合いだしっ!」

「ヒツキー!」

「比企谷くん!」

「どっちが好きなの?!」

訳の分からないまま詰め寄る2人の威圧感に言葉を発せないでいると……

「……リア充爆発しろおおお!!!」

と謎の叫び声を上げながら材木座はけたたましく走り去って行った。

残された俺はどちらも違ってどちらも良いというニュアンスの説明を1時間ほどかけて行い、なんとか死地を脱する事には成功した。

が、帰り道で両腕を2人にガツチリとホールドされて帰宅する姿を平塚先生に見られて八つ当たりを受けたのは良い思い出ですまる

やはり俺の青春ラブコメハーレムは間違っている